

社会主義理論学会 第21回研究・討論集会(2010.4.29)

統一テーマ: 現代資本主義をどう超えるか

ユートピアの落とし穴を超えて

明治大学政治経済学部・西川伸一

nisikawa1116@gmail.com

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~kokkaron/>

〔内容〕

- 1 拙著(ロゴス、2010)の執筆動機
- 2 牛乳盗難事件が示唆するもの
- 3 「そんなことはなかった」と言わせない
- 4 慣れていく怖さ
- 5 「前史」は終わらない



1

1 拙著(ロゴス、2010)の執筆動機

- ★ 『動物農場』に政治の核心の束をみる。
- * オーウェルの執筆意図: 「中心となるアイデアにかぎれば1937年だったが、書き出したのは1943年も押しせまったころだった。」(オーウェル 2009a: 181) → 「社会主義運動の再生〔のため〕ソヴィエト神話を破壊する」「物語のかたちでソヴィエト神話を暴露する」(拙著 2010: 2-3)
- ★ 拙著: ロシア革命を前提にした指摘を普遍的に読み替える。
= オーウェルのメッセージの現代的再把握。
- * 拙著書評: ゼミHP > 「What's new」 > 『動物農場』政治学」
- * 「自己批判」(佐藤義夫・和洋女子大教授の指摘): 「子どもはすべて人工受精によって生まれ、公共施設で育てられます。」(同上 28) ←→ 「子どもはすべて人工授精で生まれ、公共の施設で養育されるべきだといふのである。」(オーウェル 2009b: 102)

2

2 牛乳盗難事件が示唆するもの(1)

「決議」

ジョーンズの屋敷は博物館に。動物はそこに住まない。

「七戒」

一、いやしくも二本の脚で歩くものは、すべて敵である。

二、いやしくも四本の脚で歩くもの、もしくは翼をもっているものは、

すべて味方である。

三、およそ動物たるものは、衣服を身につけないこと。

四、およそ動物たるものは、ベッドで眠らないこと。

五、およそ動物たるものは、酒をのまないこと。

六、およそ動物たるものは、他の動物を殺害しないこと。

七、すべての動物は平等であるが(拙著2010:53)なし』(1913)

2 牛乳盗難事件が示唆するもの(2)

- * スクィーラー(squealer)の詭弁:「実をいえば、われわれのほとんどが、ミルクもリンゴも大嫌いなのだ。…その目的はただひとつ、健康を保持するためなのだ。ミルクとリンゴは(同志諸君、科学がちゃんと証明しているのだが)、豚の福祉にぜったい欠くことのできない成分を含んでいるのだ。われわれ豚は、頭脳労働に従事している。この農場の運営と組織は、すべてわれわれの双肩にかかっている。われわれは、日夜、同志諸君の福祉に心をくだしている。したがって、われわれがあのでミルクを飲み、あのリンゴを食べるのも、ひとえに同志諸君のためなのだ。」(拙著2010: 67)
- * squeal:キーキーと金切り声を上げる、ブーブー、ギャーギャーという。
- ★革命主導グループによる革命の「果実」の独占→「科学」の名の下にイデオロギー的に正当化。

2 牛乳盗難事件が示唆するもの(3)



- * 映画「インビクタス 負けざる者たち」(2009)
- * マンデラ:27年間の服役から大統領へ
- * 黒人と白人の和解による国の統合目指す→「30年近く自分を閉じ込めた人々を、大統領は許せる人なんだ」
- * ラグビー・ナショナルチーム:「スプリングボクスspringboks」(トビカモシカ)、ユニフォーム(金と緑)、エンブレムを変えない。
- ★仕返しをしないで赦す寛容さ。
- * 大平正芳の考え方:「イデオロギーが嫌いだし、リジッドに考えるのは嫌いだし」「イデオロギッシュな人に欠けているのはそのところで、自分が相手だったらどうだというようなことは一切考えないのですよ。一方的に自分の考え方を主張する。」
(森田 2010: 174-175)
- ★人に頼らず制度的に担保できるか。

5

3 「そんなことはなかった」と言わせない

- * 農場住宅に住む豚たち→「決議」違反→スクイラー「そんなことはなかった」/「そのような決議の記録がどこかに存在するのか? どこかにそれが明記されているのか?」
- * ベッドで眠る豚たち→「七戒」第4戒違反→「およそ動物たるものは、シーツをかけたベッドで眠らないこと」と加筆。
- ★権力を記録で縛る。
- * アメリカ:大統領記録法により「迅速かつ完全な公開の義務」
- * 国立公文書記録管理局(NARA):“Democracy starts here”.
- * 福田康夫政権「唯一」の功績:公文書管理法案策定→2009年6月成立→2011年4月施行
- * 2010年4月9日東京地裁判決:沖縄返還文書の日米密約の存在を認め、開示を命じる。廃棄の立証を国に求める。「国民の知る権利をないがしろにする国の対応は不誠実だ」

6

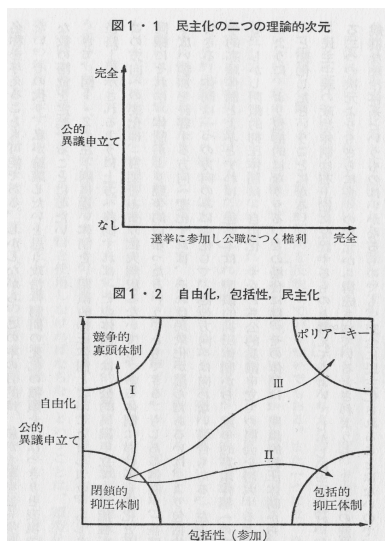
4 慣れていく怖さ

- * 「動物農場」における粛清:「告白と処刑がえんえんとつづいてゆき、ナポレオンの足もとに動物の死骸が山と積まれ、空気中には血なまぐさいにおいがたちこめました。」(オーウェル 2009a: 103)
- * 「先日の処刑は、たしかにあの規定と矛盾しているな、という感じがした。」→「七戒」第6戒「およそ動物たるものは、理由もなく、他の動物を殺害しないこと」
- * 豚たちの酒盛り→第5戒「およそ動物たるものは、過度に酒をのまないこと」
- ★違和感に慣れない。さもないければ、「変わらない風景」に不感症に。気づいたときにはもう手遅れ。
- * 「すべての動物は平等である。/ しかし、ある動物は、ほかのものより/ もっと平等である。」
- * 「動物農場」は「荘園農場」へ;二本足で歩く豚。

7

5 「前史」は終わらない(1)

ロバート・ダール:「ポリアーキーpolyarchy」(多頭制)



閉鎖的抑圧体制:封建社会
競争的寡頭体制:19世紀イギリス
包括的抑圧体制:旧ソ連、中国、北朝鮮

ポリアーキー:日本、韓国、欧米諸国

「民主主義の政治体制は右上端に位置するものと考えてもよい。…私の意見では、現実の大規模な政治体系というものはいかなるものでも、完全に民主化されることはないので、現実の体系で右上端にもっとも近いのをポリアーキー(polyarchy)とよびたい。…それゆえ、ポリアーキーは、完全ではないかも知れないが比較的民主化された体制と考える。」(ダール 1981: 12-13)

5 「前史」は終わらない(2)

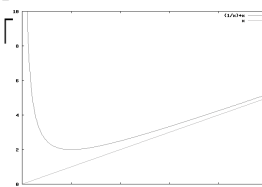
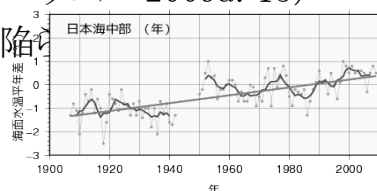
- * 「命名していないからといって、そこ[中央部]にあてはまる体制が存在していないというのではない。それどころか、おそらく今日の世界の圧倒的多数の国家の体制は、事実上この中央部の領域に入るだろう。」(ダール 1981: 13)
- * 「この広い中央領域内の体制を示すために、ときに、準とか準ずるという言葉に頼ることもあるだろう。すなわち・・・準ポリアーキーは、正ポリアーキーにくらべて、公的異議申し立てに厳しい制限を加えているという場合もあるし、また公的異議申し立ての可能性は同じだが、包括性の程度が劣るといふこともありうる。」(同上)
- * 民主主義 > ポリアーキー > 準ポリアーキー
- * ユートピア (どこにもない場所) > 「疑似ユートピア」 > 「準-疑似ユートピア」
- * 「正」と「準」→不可逆ではない。

9

5 「前史」は終わらない(3)

- * 「この社会構成体[資本主義社会]をもって人間社会の前史はおわりをつける。」マルクス『経済学批判』「序言」
- * 「メージャー爺さんの予言した動物共和国は、いまだにその到来が信じられていた。いつの日か必ずやってくるであろう。近い将来ではないかもしれない。今生きている動物たちが、みんな死んでしまった後かもしれない。しかし、それでも、やがては実現するはずなのだ。」(拙著 2010: 188)
- * 「ほとんど一夜にして、われらはゆたかに、自由の身になれるだろう。」(オーウェル 2009a: 15) ←→ 「piecemeal」

★「来世信仰」に陥



10

5 「前史」は終わらない(4)

- * 「ベルンシュタインにとって社会主義の最終目標は終りのない闘いを意味する。世界は決して終らず完成することがない。改良家の闘いは、家庭の主婦のように終わりがない。こうしてみれば、初めて「最終目標はない。運動がすべてである」とした彼の真意も理解され得るのである。」(ゲイ 1980: 198)
- * 鷗外『青年』にみられる「来世信仰」:「一体日本人は生きるということを知っているのだろうか。小学校の門を潜(くぐ)ってからというもの、一しよ懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為し遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。/ 現在は過去と未来との間に劃した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。」(鷗外 1948: 62)

参考文献

- * ジョージ・オーウェル、川端康雄訳〔2009a〕『動物農場 おとぎばなし』岩波文庫。
- * ———、高橋和久訳〔2009b〕『一九八四年〔新訳版〕』ハヤカワ *epi* 文庫。
- * ピーター・ゲイ、長尾克子訳〔1980〕『ベルンシュタイン 民主的社會主義者のジレンマ』木鐸社。
- * ロバート・ダール、高島通敏・前田脩訳〔1981〕『ポリアーキー』三一書房。
- * 森鷗外〔1948〕『青年』新潮文庫。
- * 森田一〔2010〕『最後の一燈 回想の大平正芳 その人と外交』第一法規。